

特 別 企 画

500号を迎えて

「ぶんせき」誌は1975年にそれまでの会誌「分析化学」が論文誌「分析化学」と機関誌「ぶんせき」に分かれ、別冊分析化学進歩総説も引き継いだ形で誕生し、本号をもって通巻500号を迎えました。42年にわたって毎月発行を続けてこられた歴代の編集委員長、編集委員、執筆頂いた方々、編集を担当された事務局の皆様改めて敬意を表すとともに、この記念すべき時に編集委員長として立ち会えたことを幸せに思います。

本号では、500号記念として、第3代編集委員長大西先生に「とびら」をご執筆頂き、三つの特別記事を企画いたしました。

「通巻500号に寄せて」では、鈴木会長からのお言葉と、歴代委員長から当時の思い出、エピソード、苦勞話、これからの「ぶんせき」への期待・要望等々をお寄せ頂きました。歴代委員長の中で、荒木 峻先生(初代)、今枝一男先生(第2代)、鈴木繁喬先生(第4代)、庄野利之先生(第5代)は残念ながらすでに他界され、ともにこの喜びを分かち合うことができませんでした。改めて500号までの年月、道のりを感じつつご冥福をお祈りしたいと思います。

「記念対談」は、日本分析機器工業会長と本会会長による対談です。産学連携の重要性から未来に向けてものづくりや分析教育ひいてはこれからの分析企業のあり方などについてお話を頂きました。

「表紙を振り返って」は、本年の表紙に掲載されている創刊から本年までの表紙デザインについて、「表紙のこぼし」を集めてみました。表紙と照らし合わせながら、作者が表紙に込めた思いを感じて頂ければと思います。

500号を機会に、編集委員一同、温故知新、不易流行。機関紙としてのあるべき姿を改めて論じ、時代にふさわしい、また、分析化学の発展に貢献し続ける「ぶんせき」を目指す覚悟を新たにしております。今後共、叱咤激励、応援下さいますようお願い申し上げます。

〔「ぶんせき」編集委員長 加藤信子〕

通巻 500 号に寄せて

「ぶんせき」誌 500号を迎えて

「ぶんせき」誌記念500号発刊につきまして誠にありがとうございます。これまでご尽力された編集委員並びに編集関係者の皆様感謝いたしますとともに、500回を迎える学会誌発刊を会員の皆様と共に喜び申し上げます。

さて、「ぶんせき」誌は1975年に発刊され、本年で42周年を迎えます。この雑誌は会員と共に歩み、会員各位にさまざまな情報を過去42年にわたり届けてまいりました。

「ぶんせき」誌の果たす役割は大きく、日頃から加藤信子編集委員長が述べておられるように、学会の顔ともいべきものがこの「ぶんせき」誌なのです。とても評判のよい構成と内容になっており、学生・教員・企業人を問わず幅広く読まれています。

「ぶんせき」誌にはたくさんの分析化学に関わる知識や情報が凝縮しております。例えば、入門講座は分析方法や分析機器などを初歩の段階から丁寧に教えてくれる学習記事であり、私たち会員がまず分析を理解するうえでこの講座がとても役に立ちます。展望・解説では基礎から応用まで幅広く取り上げられており、最新の情報を得ることができます。話題やトピックスでは最先端の情報や up-to-date の話題を取りあげて、分析化学の幅広い研究を紹介するものであり、今日の分析化学や測定機器の発展をさまざまな分野を通しての利用や応用から知ることができ、研究者自身が刺激を受ける記事になっております。その他ロータリーや談話室で新しいトピックスや講習会・講演会の情報が得られ、分析化学会の活発な事業や会員の活動を知ることができます。

さらに最近始まったリレーエッセイでは、日頃から会員がどのような考えで分析化学に向かっているのか、あ

るいはそれに関してときには楽しくときには苦しい日々を送っているのかなどを知ることができ、つぎのエッセイもすぐに読みたくなるような記事内容を提供しております。

このように「ぶんせき」誌は500回もの間、さまざまな分析化学の知識を私たちに与え、読みやすい記事内容から会員やそれ以外の研究者などにも幅広い読者層を持っております。

電子化・国際化を迎えた今日において「ぶんせき」誌のあり方を検討する時期になっておりますが、この雑誌が一段と魅力のあるものになることを願っております。会員の情報誌としてさらなる発展を願うとともに、積み上げる情報がより多くの社会貢献を果たすことを期待しております。

〔日本分析化学会会長 鈴木孝治〕

「ぶんせき」通巻500号の発刊を祝して

「ぶんせき」通巻500号の上梓を心からお祝い申し上げます。私が編集委員長を務めましたのは1990年4月～1992年3月の3年間で、「ぶんせき」の通巻は184～219号にわたりましたが、爾来見事に版を重ねて来られたことに深い敬意を表します。

顧みますと、庄野利之委員長から電話でバトンタッチの打診を頂いたとき、果たして委員長が務まるだろうかと不安でしたが、編集理事・幹事や委員および編集担当事務局の適切なご協力によって、楽しく3年間の編集事業を進めることができたこと、また、多くの委員の方々との交流を深めるなど貴重な経験をさせて頂いたことを深く感謝しております。

1991年に日本分析化学会が創立40周年を迎えたことを記念して、1991国際分析科学会議（ICAS'91）が幕張メッセで開催されることになり、その年の「ぶんせき」8号（通巻200号）に44ページに及ぶプログラムが掲載されたことは感動的な出来事でした。

また、「ぶんせき」の掲載記事がどの程度会員に読まれているか、アンケート調査を行いましたところ、「座談会」が余り読まれていないことが判りました。しかし、40周年という節目でもありましたので、恐らくは最後になるかと思われる編集委員会主催の記念座談会“魅力ある分析化学をめざして”を行いました。後に学会賞などを受賞された9名の少壮の研究者の方々から、様々な貴重なご意見を頂き実り多いものとなりました。

1991年9月19日の編集委員会では、台風18号による豪雨のため事務局のそばを流れる目黒川が警戒水位を突破し、急遽閉会したのですが時すでに遅く、濁流と化した大通りを膝までズボンをたくし上げて五反田駅まで歩いたことは、今も忘れることができません。

最後に、日本分析化学会と会員を結ぶ唯一の機関誌で

ある「ぶんせき」が、益々充実したものとして発展されることを祈念して擱筆いたします。

〔第6代編集委員長 寺田喜久雄〕

創刊時から携わって

「分析化学」が機関誌と論文誌に分冊されるということで、その準備委に加わるようになった。記憶によれば、(故)荒木 峻先生を委員長とし、理事には氏平先生などをけん引役としてスタートした。当時は学会の体制も十分には整わずきりきり舞いをした。本会はかなりの規模である。その機関誌をゼロからつくるわけで内容(構成と規模)ほぼ全てを企画検討せざるを得ず楽な仕事ではなかった。任務はおおよそ2つあった。分冊を機会に分析化学会を発展させること。そして学術雑誌として機関誌(後に「ぶんせき」と命名される(大西先生))を機能させることであった。新しい雑誌をつくることは大変であったが、他方、様々の期待を現実化できる稀な機会でもある。準備委員一同重圧に耐えてよくアイデアをしばりつづけたものと思う。現在の「ぶんせき」誌の各欄は、内容は変転極まりないが、形式は充足当時からほとんど変わっていない。スタート時点で検討に時間をかけただけのことはあったといえよう。

さて、今後どうするかである。分析化学も科学技術の一分野として独自のプリンシプルがあってほしい。分析の自律発展的な方向性は何か? 分析全般をカバーするような視点を常に検討しつづける必要がある。個別の分野を積み重ね組織化する努力は当然必要だが、それだけでなく一步はなれた展望が議論になってほしい。とりわけ新しい発展につながる他分野との情報交換・人的交流は重要である。「ぶんせき」への社会的な要求も一段と高まるであろう。様々の規制をはじめとし、健康・安全面からの有効な研究への要求は単なる応用にとどまらず独自の研究開発を要する。また形状や配置・配位に関する適切な尺度も望まれている。この面での将来の議論も期待したい。なお隣接分野の計測自動制御学会は「計測と制御」誌を発行している。何年かに一度でよいから「ぶんせき」とジョイントした特集などを企画してみてもどうか。新しい発展のきっかけが生まれれば幸いである。

〔第7代編集委員長 合志陽一〕

「ぶんせき」誌に乾杯

「ぶんせき」誌通巻500号!おめでとうございます。私が初めて編集委員を務めたのは1976年7号から1979年3号まで、「ぶんせき」として機関誌が論文誌から独立して2年目、編集委員長が荒木 峻先生、次いで今枝一男先生に交替した時代でした。当時の分析化学

会は初台の東京工業試験所の借り住まいで、何とも古めかしい会議室での編集委員会を思い出します。編集委員は高田馬場の印刷所で出張校正を行い、デザインものの表紙は編集委員が候補を持ち寄って決めるのも定着してきました。やがて五反田に事務所を構え、“Analytical Sciences”を創刊し、論文誌「分析化学」、機関紙「ぶんせき」が順調に刊行されていきます。それぞれの編集委員会が、夏には合宿を行ったことも懐かしい思い出です。1996年4号から1999年3号までは編集委員長として、分析機器の開発で画期的な進歩を遂げた分析化学の歴史を振り返り、“二十世紀の分析化学の足跡”と題する特集を企画して、分析化学が様々な分野の発展を支えてきた側面もアピールしました。さらなるご発展を期待しております。

〔第8代編集委員長 蟻川芳子〕

通巻500号に寄せて

「ぶんせき」誌の500号が刊行されるにあたり、本誌の編集に延べ10年間携わった者として、深い感慨を覚えます。この間、事務局の佐藤忠良さん、齋藤 勲さん、久米崇史さん、佐藤 伐さんから幾度となく貴重な助言を戴いたことが忘れられません。

編集委員会の楽しみは、新しい企画を立案するときでした。どういうテーマで、それをどのように取り上げたら会員の皆さんに読んで戴けるか、各「欄」の趣旨を念頭に置きながら意見交換し、一つの企画に絞り込むプロセスが最も充実した一時でした。時間をかけて練った企画ほど、読者の評価が高かったように記憶しています。

また、印象に残っている思い出の一つは、1995年から行った誌面のカラー化（3色刷り）です。黒一色の誌面は殺風景であり、図や表によってはカラー印刷の方が分かりやすいので、編集委員会では多色刷りが望ましいと考えていました。しかし、費用の増加が心配で、しばらくの間二の足を踏んでいました。ところが3色刷りの印刷費の見積書をとって見たところ、費用の増加は意外に少なくすむことが分かり、3色刷りを断行した次第です。この多色刷りは、予想通り会員から好評を得ました。

もう一つの思い出は、世間の印刷物や書類がB5判からA4判に変わっていく中で、2000年から行った「ぶんせき」誌のA4判化です。このA4判化で誌面がゆったりし、表や図がB5判のときよりもはるかに見やすくなりました。

最近、「ぶんせき」誌の出版経費低減のため、ページ数が大幅に削減され、さらにWeb化が検討されています。本来、「ぶんせき」誌は印刷体が机上に置かれ、好きな時にいつでも手に取って読めるのが望ましい姿であると思います。もし、本誌のWeb化が避けられない場

合には、Web化のメリットを十分に生かすこと、特に記事の検索機能を充実することが肝要であると思います。

〔第9代編集委員長 小熊幸一〕

「ぶんせき」雑感

2002年からの3年間、「ぶんせき」の編集に携わり、学会と学会誌の在り方を勉強させて頂きました。学会誌は、学会の諸活動の広報、会員相互の意見交換、関係する学問・技術領域の情報提供と教育を目的としています。この点からすると、とびら、入門講座、解説、展望、進歩総説、話題、分析化学の歩み、創案と工夫、特集、こんにちには、トピックス、役員や受賞者の紹介、ミニファイル、ロータリー、などで構成され、読み易さ、装丁にも工夫を凝らした「ぶんせき」は、稀に見る素晴らしい学会誌であると感じ、学会員のご理解と、それまでの編集関係者のご努力の賜物と感謝しました。この感想は、現在の「ぶんせき」にも同様です。ただ、次のようなことが気になります。

まず、①「分析化学」に代えて「分析科学」を標榜して久しい学会が、「分析科学」としての研究・教育の在り方についての議論を「ぶんせき」誌上で進展させていないことです。また、②産官学共同の名の下に、経済に主導された研究・教育体制が確立され、学会の独自性が危ぶまれているにもかかわらず、科学・技術および学会の在り方、化学の領域で「分析科学」が担う役割、「分析科学」という学問領域の未来などに関する議論が、ほとんど誌上に表れないことです。さらに、③未来を語るには、先人の辿った道を振り返ることも重要です。しかし、分析化学史に関する記事があまり掲載されません。「分析化学の歩み」欄を拡げ、歴史に登場する分析化学の先達がどう考えながら、方法論を開発し、分析化学を展開したかを考察するのもよいでしょう。最後に、④「ぶんせき」誌が、最近、かなり薄くなっています。例えば、学会のポテンシャルを上げるために、「創案と開発」や「ロータリー」欄をさらに発展させて、会員からの発信を促しては如何でしょう。

「学会の顔」である「ぶんせき」誌の発展を願って止みません。

〔第10代編集委員長 木原壮林〕

「ぶんせき」編集に携わって

ご存じのように「ぶんせき」は、通常の学会誌、広報誌とは異なり、「お知らせ」や「ロータリーなどの事務的な情報の他、会員への教育的、啓蒙的な内容により重心があります。後者は幾つかのカテゴリーに分かれています。」「入門講座」や「講義」のような初心者・専門外の会員を対象とした教育的なものから、「進歩総説」

のように読者を絞った専門的な内容までカバーし、さらには「特集」のように時代が要請する企画も含まれます。対象分野は理工農薬等、また読者も会社・学生・研究者と、“分析化学”とは言っても非常に広い分野に渡っています。

各企画は編集委員会で立案し、著者選定、執筆依頼、そして編集・査読を経て発行されます。原稿は募集ではないため、具体的に著者の名前が挙がり、執筆の承諾を得て、成立の可能性が見通せて初めてゴーとなります。ときには、編集委員会の目論見とはかけ離れた内容、いつまで経っても提出して頂けない原稿等、最終段階で起こる難問もあり、最後まで気の許せないのが「ぶんせき」の編集でした。このように、条件を挙げて行けば、毎月の発行などとても無理のように思えるのですが、連綿と500号まで続いていることは奇跡的とも感じています。これも、各分野から推挙された見識が広く深い各委員の能力と、幹事および事務局の佐藤伐さんの不断的努力の賜ものと思います。

思い出話となりますが、当委員会では非常によく懇親会（飲み会）を持ちました。年一回の泊まりがけの編集委員会をはじめとし、編集委員会、幹事会の後は本部の下の居酒屋などで委員会の第二部（?）、時にはさらに二次会と楽しいひとときを過ごしました。委員会での問題点の詰めのような真面目な内容も含め、社会、学会、会社の話などアルコールに任せた自由な会話で盛り上がることも、良い紙面作りの一助となったのではと思っております。501号からの益々の発展を期待いたします。

〔第11代編集委員長 澤田 清〕

500号に寄せて

機関誌「ぶんせき」500号、おめでとうございます。

分析化学の基本をしっかりと伝える内容の【入門講座】、【解説】、【講義】の欄は、1975年誕生当時から今日まで、会員ばかりでなく科学技術者や教育関係者から大好評を博している。分析化学・技術の発展と普及を強力に推進する日本分析化学会の最たるこの貢献を讃え、ご執筆・編集の労を取られた膨大な数の皆様に敬意を払いたい。

1996年初めて委員に加わった私にとって、学術雑誌編集委員の経験は多少あったものの、自らの専門分野をはるかに超えた視点で編集企画を行い、場合によっては執筆にも携わる「ぶんせき」誌編集の裏方の努力は驚きであった。【「ぶんせき」電子掲示板】は、K先生による日常的なインターネット情報収集と毎月の記事執筆で成り立っていた。【ニュースプラザ】は日刊工業新聞など科学経済に強い新聞の中で会員に有用な記事を、企業の委員が手分けして探り200字ほどに纏め即掲載の努

力の賜物であった。分析系洋雑誌の【タイトルサービス】は、元編集委員の協力で成り立っていた。今にして思えば、インターネットブーム到来前の時代に、会員への奉仕の結晶であったと懐かしい。

今、インターネットの時代で、コンピュータで検索すれば何でも分かると思われがちである。しかし、だれでも掲載できる場所に在る分析化学関連情報にはいい加減なものが非常に多い。学問的に裏打ちされた正しい分析化学情報を発信する場が必須である。日本でその役割は日本分析化学会「ぶんせき」誌が担ってきた。時代によって情報の発信形式がどのように移り変わろうとも、分析化学に携わる者がその責務を負っており、それを実行できる場が重要である。「ぶんせき」誌のますますの発展を期待する。

〔第12代編集委員長 楠 文代〕

500号に寄せて

僕が「ぶんせき」誌の編集に携わったのは、7年間（84号分 17%）。平委員、幹事、そして委員長。思いがけず長く、深く関わらせていただいた。そして、その時からの人の繋がりは今も続く。民間企業の一分析担当者であった僕にとっては宝物のような経験であり、存在である。

あの激戦、編集委員による表紙図案の選考を二度も勝ち抜けたこと、新企画、「ニュースプラザ」での夜な夜な実施した毎月毎の記事選び、執筆、編集の慌ただしさ、東日本大震災後の緊急連載「原子力を正しく理解する」での機動力、「国プロ：元素戦略プロジェクト」、「フロンティアソフトマター開発ビームライン（FSBL）」「電池の開発、製造プロセスを支える分析評価技術」などの産業界向けの特集、など等。編集委員の皆さんの熱意と力量で成し得た成果であり、今もその時のわくわく感が蘇ってくる。

日々汎用化し、主役化している分析。創り手から使い手への主役交代。それぞれの立場で向き合い方が変わり、求められるものも、新しさ（オリジナリティ）から倫理面を含め利用される場までの正しさへと変わってきている。そんな今、「ぶんせき」誌の存在意義、存在感は、増すはずである。にもかかわらず、分量は、減の一途。「質で勝負せよ」との時代の声か？編集者の皆さんには、萎えることなく、フォローの風が吹くまで頑張っていたらどうか。

執筆者、読者、編集者の皆さんが、「いいね」と云える作品で在り続けて欲しい。現役復帰は無理としても、強力なサポーターであり続けたいと思っている。

ともあれ、祝500号。目指せ501号。

〔第13代編集委員長 小西徳三〕